
遊 戯 王デュエルモンスターズGX + 輝石の騎士 +

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊 戯 王デュエルモンスターズGX 十輝石の騎士十

【Nコード】

N3524Y

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

時は世界最強のデュエルキング・武藤遊戯が誕生してから数年後。その跡を継ぐ運命にありし者・遊城十代がデュエル・アカデミアに入学した。そして時を同じくして、一人のデュエリストが現れる。

輝石に奇跡が合わさり時、新たな煌きが次代を照らす。光り輝く軌跡となれ！

TURN - 01 遊戯を継ぐ者（前書き）

この小説では、生贄に捧げる「リリース。融合デッキ」エクストラデッキと、現在の用語に変換して連載します。

TURN - 01 遊戲を継ぐ者

日本の童実野町。時は既に正午を過ぎようと、太陽が街の真上を通過していた。そしてちょうどその頃、童実野町の一角に存在する海馬ランド。そこでは、デュエル・アカデミアの入学受験二次審査が行われていた。

海馬ランドは「海馬コーポレーション」の本社ビルがある施設内の大きなビルの天辺に建設された武道館で、入学試験は行われていた。

受験番号10。三上信也くん。

放送で呼ばれた受験生がデュエルスペースへと向かっていく。そう、二次審査とはデュエル実技。そして、一次審査はカードの知識を知る為の筆記試験になる。デュエルスペースでは教師たちが、試験用に構築された専用デッキで受験生とデュエルし、その結果と仮定次第でアカデミアへの入学が決まる。

因みに、実技試験での受験番号は筆記試験での成績優秀者順にーから数字を振り分けて決まる。

受験番号2。九条理人^{くじょうりひと}くん。

その放送で、真っ赤な帽子を深々と被った私服の少年が降りていく。その腕には白いデュエルディスクが装着されていた。

「おいおい。アイツ私服だぞ」

「中退か？　っていうか帽子とれよ」

「負けた時に顔を見られるのが恥ずかしいんじゃないの？」

客席で受験者を眺めている青い制服を着た在校生たちが口々に彼の悪口を口にする。

彼が聞こえているかどうかはわからないが、デュエルスペースに現れた彼は深々を被った帽子のキャップを左手で更に深くかぶっていた。

「ボンジョールノ！」

そういつて現れたのは青い外套を着込んだ金髪の外国人だった。

「あなたが九条理人でスーね？　話はちゃんとして聞いてルーノです」

「はい……」

理人は小さく頷く。

「あなたの相手は私わたくし、クロノス・デ・メディチ。実技担当最高責任者やってルーノです」

「お願いします……」

理人が左腕を構え、装着されたデュエルディスクを展開する

「デュエルコート、オン！」

クロノスも外套に装着したデュエルコートを機動し、胸部に装着したデッキから手札を五枚ドロースする。続いて理人もデッキから五枚カードをドロースする。

『デュエル!』

クロノス LP4000 VS 理人 LP4000

「僕のターン。ドロー」

理人は淡々とカードをドローし、手札のカードを一枚をデュエルディスクに置く。

「ジェムレシスを召喚」

理人の場にアルマジロに似たモンスターが^{ソリッド・ヴィジョン}立体映像として後ろ足で立ち上がって現れる。

「ジェムレシスの効果発動。召喚に成功し時、デッキからジェムナイトを一手札に加える」

『ジェムレシス 4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1700 / 守500
/ 効果：このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついたモンスター一を手札に加える事ができる』

「僕は、ジェムナイト・ルマリンを手札に加える」

デュエルディスクからデッキを抜き取り、モンスターカードを一枚手札に加え、デッキをシャッフルしてデュエルディスクに戻す。

「そして^{マジック}魔法カード、^{デュアル・サモン}二重召喚を手札から発動」

理人はデュエルディスクに魔法カードを差し込み、理人の前に魔法

カードの立体映像が浮かび上がる。

「このターン自分は通常召喚を二回まで行っ事が出来る」

デュアル・サモン
『二重召喚』を場から墓地に送り、理人は手札からモンスターを
フィールドに出す。

「モンスターをセットし、カードを一枚セット。先行一ターン目は
攻撃できない……ターンエンド」

理人の前に裏側守備表示のモンスター一体と伏せられたカードが
一枚現れる。LP4000でフィールドにモンスター二体とリバー
スカード一枚で理人はターンを終了。

そのデュエルの様子を上から見守る二人の青い制服を着た生徒の
姿があった。

「へえ、あの子が受験番号2なんだ」

柵にその白い両腕を着いて、体重をかける金髪長髪の女性が理人
を見て微かな笑みを浮かべる。そしてその隣の長身の青年が理人に
視線を向ける。

「召喚したモンスターの攻撃力はそこそこ高い上に、守備モンス
ターと伏せカードもある。万全の布陣だ。だが問題は――」

「ええ、さっきサーチしてきたジェムナイトというモンスター。聞
いた事のないモンスターだわ」

二人は視線を鋭くして理人に注ぐ。聞いた事も無い名のカード。
その力を一つも見落とさないと云うかのように。

「校長先生は、あなたの実力を出来る限り全力で出させてあげなさい、との事でーすの」

「全……力……」

クロノスの言葉に、理人は俯いてしまう。

「……だめだ………そんなの………じゃない………」

「勿論、加減は自分でしても結構ですーノ」

ぶつぶつと独り言を繰り返す理人だったが、クロノスは気が付か無かったのか聞こえなかったのか理人にフォローの様な一言を入れる。

「………はい」

理人は小さくクロノスに頷いた。

「では、あなたの力を見せてもらいますーノ！ 私のターン。ドロー」

クロノスがデッキからカードを一枚ドローする。

「私は、ゴブリン突撃部隊を召喚！」

クロノスの場に武装した数体のゴブリンが一団となって現れる。

『ゴブリン突撃部隊 4 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守0 / 効果：このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備

表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない』

「更に、手札から魔法カード、デュアル・サモン二重召喚を発動するノーネ」

「……！」

魔法カード『デュアル・サモン二重召喚』の効果で、クロノスはもう一度だけ通常召喚の権利を得る。

「私は、二体目のゴ布林突撃部隊を召喚するノーネ！」

クロノスの前に再びゴ布林突撃部隊が召喚される。

「そして永続魔法、連合軍を発動すルウウノ！」

永続魔法『連合軍』の効果は、自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族モンスターの攻撃力を自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族・魔法使い族モンスターの数×200ポイントアップさせる。

「私の場には、戦士族モンスターが二体いるノーで、ゴ布林突撃部隊の攻撃力は400ポイントアップし、2700となルウーのでス！」

『ゴ布林突撃部隊』×2 攻撃力2300+400=2700

「そして、バトル！ 一体目のゴ布林突撃部隊で、ジェムレシスを攻撃！」

ガハハハハハ！！

クロノスの号令で、ゴ布林達が『ジエムレシス』に襲いかかり、鉄の金棒でタコ殴りにする。『ジエムレシス』は辛そうな悲鳴を上げて碎け散った。

「……っ！」

その衝撃が理人を襲い、『ゴ布林突撃部隊』の攻撃力2700から『ジエムレシス』の攻撃力1700を引いた数値、1000ポイントが理人のライフポイントから引かれる。

理人 LP4000 - 1000 = 3000

「二体目のゴ布林突撃部隊で伏せモンスターを攻撃すルウーノ！」

ゼハハハハハ！！

クロノスの号令で再びゴ布林達が襲いかかって裏側表示のモンスターが表側表示になり、エメラルドの甲羅を背負った陸ガメが姿を現す。

『ジエムタートル 4 / 地属性 / 岩石族 / 攻 0 / 守 200』

しかし、『ゴ布林突撃部隊』の攻撃力に守備力が足りずに光となつて破壊される。

「守備表示モンスターは戦闘で破壊されても、戦闘ダメージはない。そして、ジエムタートルのリバース効果、発動」

再び『ジエムタートル』のカードがフィールドに現れる。

「自分のデッキからジェムナイト・フュージョンを一枚、手札に加える」

理人はデッキから魔法カードを手札に加え、シャッフルして元に戻す。

「ゴブリン突撃部隊は攻撃したバトルフェイズ終了時に守備表示になる。カードを一枚伏せてターンを終了するノーネ」

クロノスはLP4000の状態で、守備表示モンスター二体と伏せカード一枚でターンを終了し理人にターンが回る。

「僕のターン。ドロー」

デッキから一枚カードをドローする。それを見て、理人は僅かに笑みを浮かべる。

「僕は……このターンで決める」

「何ですト？」

クロノスは理人の言っている事を理解できず首をかしげる。いや、理解はできているが納得できないという事だろう。

「僕は、ジェムナイト・フュージョンを発動！」

理人はデュエルディスクに魔法カードをセットし、フィールドにそのカードが現れる。

「ジェ、ジェムナイト・フュージョン？　なんですか、ソレ？」

「ジェムナイト・フュージョンは、ジェムナイトと名の付いた融合モンスターを融合召喚する専用カード。僕は、手札のジェムナイト・サファイヤとジェムナイト・ルマリンを、融合！」

宝石のイエロートルマリンとサファイヤが互いに重ね合わさり、火花を散らしながら回転し、互いに碎け散る。

「輝石と輝石が研磨されし時、新たな輝きを呼び起こす。光り輝く道となれ！」

理人が右手を翳すと同時に碎け散った二つの宝石が一点に集束されていき、やがて一つの宝石　トパーズとなってフィールド上に舞い降りる。

「融合召喚！　現れよ、ジェムナイト・パーズ！」

トパーズが碎け、その中から黄色い甲冑を身に纏い坂手持ちダガーを両手に所持した輝石の騎士が現れる。

『ジェムナイト・パーズ　6 / 地属性 / 雷族 / 攻1800 / 守1800　融合「ジェムナイト・ルマリン」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター。このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる』

「何て綺麗なモンスターなの……」

「ジェムナイト・パーズ……宝石のトパーズをあしらったモンスターという訳か」

上階で見ている二人の男女が口を揃えてその美しさに見惚れる。
だが……

「攻撃力1800？ 雑魚じゃん」

「うわ、見た目だけかよ。しかも口先だけ」

「フン。やっぱり雑魚には雑魚がお似合いだな」

などと言い出す生徒たち。しかし理人はそんな事は気にしない。

「僕は手札から装備魔法、フュージョン・ウェポンをパースに装備」

理人がカードをデュエルディスクに差し込むと『ジェムナイト・パース』の右腕がレーザー砲の様に変化する。

「このカードはレベル六以下の融合モンスターにのみ装備可能。そして、装備したモンスターの攻撃力を1600ポイントアップさせる」

『ジェムナイト・パース』 攻撃力1800+1600＝3400

「何ですト！？」

「バトルフェイズ！ パースでゴブリン突撃部隊を攻撃！」

『ジェムナイト・パース』がゴブリン達へと一気に駆け出す。

「ジェム・レーザーブレード！」

おおおお！！

変化した腕を振り上げて光の剣が出現し、『ジエムナイト・パーズ』がそれを勢い良く振り下ろして『ゴ布林突撃部隊』を一閃する。光の剣に切り裂かれたゴ布林突撃部隊は砕け散る。

「ぬぬぬのヌ！」

「そしてパーズは、戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「な、なにイ！？」

「破壊したゴ布林突撃部隊の攻撃力は2300。よって、2300のダメージが与えられる。ジエムフラッシュ！」

せええええ！！

『ジエムナイト・パーズ』が身体全体から金色の輝きを放つ。

クロノス LP4000 - 2300 = 1700

「ですが、次のターンでそのモンスターを破壊する方法が、私の手札には既にあるノーネ。問題ないノーネ」

「いや、このターンで終わりだと言った筈」

「なっ……！？」

「パーズは一度のバトルフェイズ中に二回攻撃ができる！」

「私の場には、ゴブリン突撃部隊が守備表示で存在しているノオです……」

「しかし、パースは破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果がある」

クロノスの目の前で、『ジェムナイト・パース』が再び腕を振り上げ、勢い良く振り下ろしてゴブリン突撃部隊を破壊する。

「リバースジェムスラッシュ！」

そしてライフポイント1700のクロノスは、ゴブリン突撃部隊の攻撃力2300ダメージを受け

「ジェムフラッシュ！」

はあああああ！！

『ジェムナイト・パース』が両腕を広げ、その身の輝きをフィールド一杯に解き放つ。

「ノオオオオオ！！」

クロノス LP0

「デュエル・エンド。僕の勝ちだよ」

理人はデュエルディスクの墓地とフィールドのカードをデッキに戻し、デュエルディスクを停止させる。それと共に立体映像が消

ソリッド・ヴィジョン

えていく。

「よく伏せカードを警戒せずに攻撃できマ―したネ。もしこれが聖なるバリア ミラーフォース だったら、勝っていたのは」

「伏せカードは永続罫^{ペナルティ}、最終突撃命令」

「ぬ……」

「デメリットアタッカーを主軸としたデッキを回すには必須カード。そして」

『ゴブリン突撃部隊』を初めとして、攻撃後に守備表示になるデメリットアタッカーは高い攻撃力の代わりに守備力は低くなっている。守備表示になっている時を攻撃されれば、彼らは高い攻撃力をいかせない。そして『最終突撃命令』は、フィールド上の表側表示のモンスターは全て攻撃表示となる永続罫。

「攻撃力が低いモンスターで攻撃してきた時、最終突撃命令を発動する事でゴブリン突撃部隊は攻撃表示となり、ダメージ計算を行う。ゴブリン突撃部隊などのデメリットモンスターにとってこれ以上に無い罫」

「フムフム……」

「それになにより。こちらが攻撃宣言しても罫を発動させなかったのがその証拠。アレを使えば、場のモンスターは全て攻撃表示となってしまうからね」

クロノスは理人の解説にウンウンと頷いて見せる。

「例え万が一違ってても、伏せカードは……」

理人はデュエルディスクから抜き取っていなかった一枚のリバー
スカードを抜き取り、クロノスに見せる。そのカードとは

「盗賊の七つ道具。1000ポイントのライフを払う事オーで、相
手の罠カードの発動と効果を無効にして破壊するカウンター罠。な
るホドなるホド。聞いた通りの実力者なノーネ。これにて、試験デ
ュエルは終了なノーネ」

「ありがとうございました」

理人はクロノスに頭を下げて上へ戻っていく。クロノスはその後
ろ姿を最後まで見つめてから、自分も審査室へと戻っていく。

そしてその様子を上から見下ろしていた二人の男女。

「彼は間違いなくラー・イエローで合格だな。そして直ぐにオベリ
スク・ブルーに入ってくるだろう」

「でしょうね。にしても、ジェムナイト・パーズ……か。やっぱり
聞いた事も無いカード。彼はほとんどそのカードを使うことなく勝
つてしまったし、もう少し見てみたかったけど」

女性は残念そうに呟く。それを聞いて、隣の男性が不敵な笑みを
浮かべる。

「フツ……。俺は戦ってみたいけどな」

「あら、カイザーと呼ばれる貴方が進んで戦いたいなんて、珍しい。

でも、私も戦ってみたいわ」

二人がそんな風に会話をしている間に、理人とはば同時に始まっていた受験番号1の三沢大地の試験デュエルが終盤を迎えようとしていた。

「如何に優秀なキミでも、この超守備デッキの前に、私のライフをこれ以上削る事は出来ない」

そういう教師のフィールドには魔法・罠はなく、守備力2600の『ビック・シールド・ガードナー』と2200の『機動砦のギア・ゴーレム』が守備表示で存在している。対して三沢大地のフィールドには伏せカードが一枚と攻撃力1900の『ブラッド・ヴォルス』が一体のみ。

普通に考えれば、守備力に遠く及ばない『ブラッド・ヴォルス』では勝てないと思うだろう。しかし

「罠^{トラップ}カード、破壊輪、発動！」

三沢大地は伏せカードをオープンする。

「んなっ！」

教師が驚愕する中、三沢大地はこの罠カードの説明を始める。

「この罠カードは、フィールド上の表側表示で存在するモンスター一体を選択して破壊し、お互いにそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける」

『ブラッド・ヴォルス』の首に手榴弾の輪が装着され、一気に爆

破。そして、その攻撃力がお互いのライフポイントから引かれる。

教師 LP1900 - 1900 = 0 三沢 LP3000 - 1900 = 1300

「試験デュエル終了。おめでとう、君の勝利だ」

「ありがとうございました」

三沢は教師に頭を下げて上に戻っていく。そしてその様子を上階のベンチに座って数人の生徒が見下ろしていた。

「受験番号1番の三沢大地は、なかなかやりますね」

「噂を聞いて、わざわざ見に来た甲斐がありましたね。万丈目さん」

二人の生徒に挟まれ、敬語を使われている黒髪の生徒は鼻で笑い飛ばす。

「ナンセンス。所詮入試デュエルなど、レベルを低く設定されているもの。学園から出てきて損したぜ」

うんざりした様な表情をする万丈目と呼ばれた生徒。

「だが」

万丈目は獰猛な目つきを会場の一角に向ける。そこには、先ほどクロノスを破った理人の姿があった。

「無駄足にはならなかったようだ。しかし、デュエル・アカデミア

にキングは二人もいない。オレがオンリー・ワンだ」

ギラギラした目を感じたのか、理人はその視線から逃げるように帽子を更に深く被って移動し始める。

「あの一番、見事なコンボだったな」

「そりゃそうさ。受験番号1番、つまり筆記試験第一位の三沢君だよ」

「ふうん。受験番号はそういう意味か」

理人が歩いていると、ふとそんな会話が聞こえてきた。その方向に目を向けてみると、やはりそこには見覚えのない中学の制服を着た身長差のある二人が話していた。

「合格は筆記の成績とデュエルの内容で決められるんだ。デュエルには何とか勝ったけど、受験番号119のボクじゃ受かるかどうか……」

「心配すんな！ 運が良ければ合格するさ。オレだって110番だと背の高い方の少年が背の小さい少年の背を叩いて励ます。」

「キミも受験生だったの？」

「ああ！」

「でも100番台のデュエルは一組目でとっくに終わってるよ」

と、背の小さい少年が言うと、背の高い方の少年はズッコケた。

「ふふふ」

「ん？」

漫才の様な流れの会話に、思わず笑ってしまった理人。

「ごめん。テンポのいい会話だったからつい……笑ってごめん」

「別にいいよ。アンタも受験生？ 私服だけど」

「そうだよ。中学校には通ってなかったけどね」

「さっきデュエルしてた受験番号2番の人……ですよね？」

「あ、うん。そうだよ」

理人は戸惑いながらも頷く。

「あのジェムナイトってカード見た事も聞いた事も無いけど、どんなカードなの？」

「今は秘密、かな。約束なんだ、ごめんね」

「そうなんだ」

そんな会話をしている間に、三人の前の座席に先ほどデュエルを終えた三沢が戻ってきた。その三沢に、受験番号110が声をかける。

「すつげえ強いなお前」

「ああ」

「今年の受験生で、二番目ぐらい強いかもな」

その一言に、三沢も理人も受験番号119番も反応し、言い返さうとしたまさにその時。

受験番号110、遊城十代くん。

「よし、オレの番だ」

放送が掛けられて、受験番号110番 もとい遊城十代はデュエルフィールドへと降りて行こうとする。

「キミ」

「ん？」

「なぜ、僕が二番なんだ？」

「一番は、オレだからさ」

そう自信満々に言うと、十代は降りて行っ

た。
「ボクより筆記試験の成績が九番良いだけでなんであんなに自信が持てるんだろ？ 羨ましい……」

受験番号119番が今にも口に指を咥えそうな表情でそう呟く。

(おい)

「……！」

理人の心に自分と同じ声が響き、語りかける。

(お前も感じたか？ あの底なしの様な力をよお)

その声に、理人も応える。

(うん。まるで、全てを包み込む様な包容力だった。彼も、僕と同じ様な力を持っている？)

理人は目の前で、自分が戦ったクロノスと十代のデュエルが始まろうとしているのを見つめながら、自分の心と語り合う。

(さあな。ホラ、デュエルが始まるぜ？)

その言葉を最後に声は聞こえなくなり、同時に十代とクロノスとのデュエルが始まった。

十代が先行でドロし、ドロしたカードをデュエルディスクに置き、十代の前に緑色の鳥獣をモチーフにしたHEROが身を守る格好で現れる。

エレメンタル・ヒーロー

『E・HERO フェザーマン 3 / 風属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守1000』

更に十代のフィールドに伏せカードが出現し、十代がターンを終了する。

（先手としては悪くない。様子見って所かな？）

クロノスがデッキからドロし、そのまま少し思案する。

（僕の際は攻撃型のデッキだったけど、今度のデッキは……）

クロノスは手札から魔法カード『押収』を発動する。

「押収は、相手の手札を見て一枚を墓地に送る魔法カード。だがその代償に発動コストとして1000ポイントのライフを支払う。試験に使うようなカードじゃないぞ」

三沢が表情を一瞬だけ固くしながらもカードの解説をする。その説明に受験番号119番は「へえ」と聞いていた。

その間にクロノスは十代の手札から魔法カード『死者蘇生』を墓地へ送らせる。そして次にカードを二枚セットし、魔法カード『大嵐』を発動する。

「大嵐は、フィールド全体の魔法・罠をすべて破壊するカードだ」

「大嵐の発動前にカードをセットしたって事は、あのコンボを……」

フィールドの罠が全て破壊され、クロノスのフィールドに黄金の邪神トークンが現れる。それと共に会場がどよめく。

「何がどうなってるのかさっぱり……」

その中で理解できていない受験番号119番。

「さっきクロノス先生が破壊した自分の罠カードは、黄金の邪神像」

「黄金の邪神像は破壊された時、邪神トークンを特殊召喚するという特殊な罠^{トリップ}。その効果は破壊されないと発揮されないが、破壊さえされればさつきセツトしたとしてもその効果を使う事が出来るんだ」

「へえ……」

「常識だよ？ 受験番号119番」

「う……」

理人の一言に胸を押さえて呻く受験番号119番。だがデュエルは続く。クロノスは二体の邪神トークンをリリースし、最上級モンスターを召喚する。

召喚されたモンスターは

アンティーク・ギアゴーレム
「古代の機械巨人……。伝説のレアカードだ」

アンティーク・ギアゴーレム
『古代の機械巨人 8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守30

00 効果 / このカードは特殊召喚できない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステッ
プ終了時まで魔法・罠カードを発動できない』

アンティーク・ギアゴーレム
クロノスが古代の機械巨人で攻撃を行い、『E・HERO フェ
ザーマン』を吹き飛ばす。

アンティーク・ギアゴーレム
「古代の機械巨人は3000。フェザーマンの守備力は1000。
敵いっこないよ！」

「それだけでは済まないさ。このモンスターは、守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備表示モンスターのその守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手にダメージを与えるんだ」

「そんなっ！？ 掟破りモンスターじゃないか！？」

「しかも、あのモンスターは攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できなくなる効果を持つてる」

「なっ！？ 掟破りにもほどがある！！」

受験番号119番が驚愕の声を立て続けにあげる。だが、三沢と理人は特に驚く事も無く十代のデュエルを見続ける。

だがこれで十代のライフポイントは4000から2000に減った。しかし、次は十代のターンでカードをドロ―。

「一体どうやって攻略する気なんだ？」

会場の視線が十代とクロノスのデュエルに集中し、その一挙手一投足を見落とさないように注意深く見つめる。そしてその視線の先で、十代は羽の生えたクリボーを守備表示で召喚する。

『ハネクリボー 1 / 光属性 / 天使族 / 攻300 / 守200』

「あのカードは！」

「あれ？ あのカード知ってるの？」

理人が帽子の奥で目を見開く。そしてそのままクロノスのターンに回り、バトルフェイズに以降。『アンティーク・ギアコーレム 古代の機械巨人』が『ハネクリボー』を破壊する。

だが、十代のライフポイントに変化はない。

「ハネクリボーは破壊された時、このターンに受ける戦闘ダメージを全て0にする効果を持つ。だからこのターン、受験番号110番のライフは減らない」

「凄い効果だ」

受験番号119番が『ハネクリボー』の効果に感心する。だが感心している間に、十代が罠カード『ヒーロー・シグナル』を発動する。その効果は、自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動し、自分の手札またはデッキから『E・HERO』という名のついたレベル四以下のモンスター一体を特殊召喚する。

十代はデッキから『E・HERO バーストレディ』を特殊召喚する。

『E・HERO バーストレディ 3/炎属性/戦士族/攻1200/守800』

そして十代のターンに回り、ドロウする。更にそこから魔法カード『戦士の生還』を発動し、墓地から戦士族モンスター一体『E・HERO フェザーマン』を手札に加え、そのまま召喚。そして更に魔法カード『融合』を発動する。

「来た」

手札、または自分フィールド上の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスター、『E・HERO フェザーマン』と『E・HERO バーストレディ』を墓地に送り、その融合モンスター一体をエクストラデッキから融合召喚する。

『E・HERO フレイム・ウィングマン 6/風属性/戦士

族/攻2100/守1200 融合「E・HERO フェザーマン」
+「E・HERO バーストレディ」[㊦]

「格好いい……」

「フレイム・ウィングマンは、融合召喚でしか特殊召喚できない。
戦闘によって破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手
に与える事ができる」

「でもさ、フレイム・ウィングマンの攻撃力は2100。^{アンティーク・}古代の機械巨人の攻撃力には届かないよ」

「いや、彼はこのターンでクロノス先生を倒すよ」

理人が言った台詞に、三沢も受験番号119番も周りの生徒も理人に振り返る。

「彼が次に使うカードは、フィールド魔法、摩天楼 スカイスクレイパー！」

理人が言った通り、十代の言葉に合わせるかの様にフィールド魔法カード『摩天楼 スカイスクレイパー』を発動し、二人のフィールドが夜の摩天楼に姿を変える。

「このフィールドでは、E・HEROと名の付いたモンスターが戦^{バトル}闘する時、攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃力がダメージ計算時のみ1000ポイントアップする」

「っ！？」

十代が『E・HERO フレイム・ウィングマン』で攻撃宣言し、
アンティーク・ギアゴレム『古代の機械巨人』に攻撃を仕掛ける。『E・HERO フレイム・
ウィングマン』の攻撃力がスカイスクレイパーの効果で攻撃力が3
100に上昇。アンティーク・ギアゴレム『古代の機械巨人』の頭上から炎を纏って体当たり
して大爆発する。

クロノス LP2900

そしてこれで『E・HERO フレイム・ウィングマン』の効果
が発動する。破壊したモンスターの攻撃力分、3000の効果ダメ
ージがアンティーク・ギアゴレム『古代の機械巨人』の瓦礫の雨となってクロノスに降り注ぎ、
クロノスはその瓦礫の下敷きになる。

クロノス LPO

「いいぞおー！ 110番！ー」

受験番号119番が歓声を上げ

「良きライライバルになれるかもしれないな。一番君」

三沢が小さくそう呟き

「遊城……十代……か」

理人は一人、喜びを全身で表現する十代に視線を向けながら微笑
んだ。

（面白い子と出会ったね。レイ）

（ああ、アイツとは戦い甲斐がありそうだな、リト）

理人の深々と被る帽子の奥で、真紅の瞳が一瞬だけ瞬くように赤く光を反射したような気がした。

TURN・01 遊戯を継ぐ者（後書き）

次回予告

十代

「おもしれえ！おもしれえ！おもしれえ！デュエルって楽しいよな。な！」

翔

「う、うん……」

十代

「なに暗い顔してんだよ。俺たちデュエル・アカデミアに受かったんだぜ？」

翔

「うん、そうだね」

十代

「ほら、クロノス先生も凄かったけど」

翔

「三沢君も、理人君も。きっとデュエル・アカデミアにはもっともつと強い人がいるよ」

十代

「そっかあ！ そうだよな、楽しみだぜ！」

翔

「次回は、フレイム・ウィングマン。っすよ」

次回 TURN - 02 フレイム・ウィングマン

???

「次回は俺が登場だ！ 誰だかわかるかな？」

十代

「あ、あれ？ お前、どっかで見た事……」

TURN・02 フレイム・ウィングマン

デュエル・アカデミア本校は、地球の南半球にある小さな孤島にある。そこでは生徒は三つの寮に合わせた制服で分けられる。一つはアカデミア中等部からの成績優秀者が入るオベリスク・ブルー。一つは高等部の入試試験を好成绩で終えた者が入るラー・イエロー。そして最後に落ちこぼれが入るオシリス・レッド。

そして秋の途中入学で入学が決定した生徒たちが、振り分けされた制服を着て一年生の教室に集まっていた。教室は組み分けされておらず学年で分けられている。結果、一つの教室が大学の教室ほど広い。

『ようこそ、デュエルエリート の諸君』

新規入学した生徒たちの前のモニターにアカデミア本校の校長の姿が映し出された。不精髭を生やした禿げ校長だった。

『諸君は狭き門を實力で開いてやってきてくれました。未来のデュエルキングを目指して、楽しく勉強してください』

それだけ言うと校長先生の挨拶は終わり、その後も淡々と式は進みあつという間に終わってしまった。

式が終わり、各寮での歓迎会があるそうだがそれまで時間がある為、それまで自由時間という事になった。そして此処に一人、やる事が無くてただ一人で突っ立っている黄色い制服を着て紅い帽子を深々と被る理人がいた。

「やあ、久しぶりだね。二番」

「え？」

理人は声を掛けられて振り返る。そこには、受験会場で知り合った三沢大地が立っていた。その身に纏っているのは黄色い制服。

「君は……」

「僕は三沢大地。君と同じラー・イエローだ。よろしく」

「うん。よろしく、大地くん。僕は九条理人」

理人と三沢は握手を交わす。

「理人、か。君のデュエル、僕は見られなかったけど楽しみにしてるよ」

「ありがとう」

理人は三沢と共に校舎から出ていく。行くべき寮は同じなのだから当然である。

「ところで、君は帽子を取らないのか？」

「あ、この帽子は……」

理人は帽子のキャップを握ると、しばらく無言になり更に深々と被る。

「……………」

「……………ああ、悪い。取りたくないなら取らなくていいから」

三沢は苦笑いしながら前言を撤回する。

「……………ごめん」

理人は本当に申し訳なさそうに謝る。

「いや、僕が無神経だった。その帽子は大切なモノなのか？」

「そういう訳じゃ……………ないんだけど……………取りたくないんだ」

「そうか」

そこまでで帽子の話は終わり、校舎の外に出てきた。

「やあ二番。お前もレッドか？」

その声に二人が振り替えると、その近くの碑石には腰かけた遊城十代と受験番号1119番が居た。

「いや、この制服でわかるだろ。僕はラー・イエローだ」

「制服の色って、そういう意味だったのか。あ、じゃあアンタもイエローか」

「そうだよ。遊城十代くん」

そう理人が言うと、十代は首をかしげた。

「あれ？ オレってお前に名前教えたっけ？」

「試験デュエルで呼ばれた時に覚えたんだよ」

「そうなのか」

十代は「なるほど」と納得すると、碑石から立ち上がって理人に向き直る。

「んじゃ、改めて自己紹介な。オレは遊城十代。十代って呼んでくれ」

そう言って十代は屈託の無い笑顔で右手を差し出してくる。理人は若干戸惑いながらもその手を取る。

「僕は、九条理人」

「理人か。よろしくな、理人！」

「よろしく、十代くん」

「おう！」

えへへ！と笑う十代だったが、ふと何かに気づいて首を傾げるように理人の顔を覗き込む。

「な、何？」

「へえ……。理人って綺麗な眼の色してんだな！」

「なっ……!？」

あまりにも唐突な事を満面の笑みで言われた理人は思わず身を引いて固まる。

「どうした？」

「い、いや、そんな風に眼の色を褒められたの……生まれて初めてだったから」

帽子を深々と被って俯き、誰が見ても恥ずかしそうにしているのがわかり、三沢も十代も笑う。

「しかし、君がどうしてレッドなのか不思議だよ」

「む。なんだか引つ掛かる言い方だな」

「ま、気にしない事だ。それじゃ失敬するよ、一番君」

「それじゃあね」

三沢と理人は軽く手を振って去る。

「おう。お前こそ落ち込まず頑張れよ！」

「そうそう。君たちの寮はあっちだよ」

三沢はそう十代達に言って、理人と共にラー・イエローの寮に向かう。

因みに寮はオベリスク・ブルー、ラー・イエロー、オシリス・レ

ツドの順番でランク付けされており、オベリスク・ブルーが一番待遇が良く、住む部屋も食べる料理も豪華なモノばかり。そしてラー・イエローがこのアカデミアでの基準となる生活水準となるが、それでもかなり優遇されている。だがオシリス・レッドだけは、普通校とほぼ同等の部屋に、食べ物も精々一般の食卓が単純になったレベル。つまり、オシリス・レッドは色んな意味での底辺という事だ。そうこうしている間に、二人はラー・イエローの寮にたどり着いた。

「ここがイエローの寮か」

「うわ、これでイエロー。だとしたらブルーってどれだけ凄いなんだろう」

イエローの大きくとも綺麗な外観の寮に、理人はブルーの寮を思い浮かべる。

「多分、城とかじゃないか？」

「……鼻屑とか差別が可愛く思えてきそうだよ」

「ははは、確かにな。ま、とりあえず中に入ろう」

「うん」

理人は三沢の後に続いてラー・イエローの寮の中に足を踏み入れる。

「さて、まずは自分たちの部屋に行こうか」

「うん」

三沢と理人は、デュエル・アカデミアの生徒証となるデジタル端末を開き、自分のパーソナルデータを開く。

理人の画面には209号室と表示され、三沢の画面には101号室と表示された。

「どうやら僕らの部屋は端と端の様だな」

「みたいだね。荷物はもう運び込まれてる筈だから……とりあえず荷物の整理かな？」

「そうだな。それじゃ、歓迎会でな」

「うん。またあとで」

三沢と理人はそう言って、三沢は通路を右へ、理人は通路を左へ進みその先にある階段を上る。二階に上がって暫く歩くと、理人はすぐに自分の部屋を見つけた。制服と一緒に渡された寮のカードキーでドアロックを解除し、中へ入る。

そこは、一人暮らし出来るマンションの一部屋ぐらいの広さがある部屋だった。ベットや机は勿論、更にパソコンまで備え付けの部屋だった。

「うわぁ、結構広いな。流石は海馬さんの建設したアカデミアだね」

理人は一人で誰かに語り掛ける様に言う。誰も応える訳がない筈だが、彼にしか聞こえない声。何時の頃からか存在するもう一つの人格、レイ。

（そうかあ？ 俺にはちょっと狭いんだがなあ。瀬人の野郎、ケチケチしやがって）

彼は理人とは真逆でとても荒々しい印象が強く、運動、勉強、デユエルと全てが理人よりも上だ。

「そんな事言つてると、また海馬さんに滅びのバーストストリーム三連射を喰らうよ？」

理人が溜息を吐きながら言う。だが、理人にだけ聞こえる声は臆する事無く言い切る。

（ハッ！ 今度は俺があドラゴンの白い龍を黒く塗り潰してやるよ。待つてろよ。青眼ファイズバカ！）

「あははは……………アレを浴びるのは僕なんだけどなあ」

理人は彼が興奮しているのを苦笑いしながら既に運び込まれている自分の荷物の整理を始める。

理人が荷物の整理を始めて数時間後。既に太陽は完全に沈み、世界は闇に包まれていた。

「…………ふう、終わった」

理人が荷物の整理を終えて一息吐く。ふと部屋に備え付けられている時計に目を向けるデジタル時計には既に「6：55」と表示されていた。理人は「あれ？」と首を傾げて、今日の予定を端末で確

認する。

するとそこには、歓迎会の開始は七時と表示される。

「うわっ！ もう行かないと遅れるよ！」

理人は部屋を出ると、急いで食堂へ向かう。その通路にはもうラ
ー・イエローの生徒の姿は見えない。

（ははは！ 逃げ逃げ！ じゃないと食いつばぐれるぜ！）

「もう！ 自分は見てるだけだからって！」

理人は見えないもう一人に向かって文句を叫びながら食堂へ急ぐ。
階段に差し掛かり、理人はその階段の手すりを睨みつける。

（チェンジだリト！ 飛び降りるぜ！）

（うん！ 頼んだよ、レイ）

理人は一瞬目を瞑り、再び目を開く。その目つきは鋭くなって口
元に笑みを浮かべる。

「はっ！」

走っている勢いのまま、手すりに右手を着いて、右手で体重を支
えながら手すりを飛び越える。そのまま重力に従って理人は階下に
ダンッ！と降り立つ。

「んじゃ、後は任せたぜ」

理人は再び目を瞑り、再び目を開いた時には鋭い目つきは無く
なり、元の儚げな色を宿した目に戻っていた。

理人そのまま走りだし、なんとかギリギリ食堂に間に合った。

「やあ、理人。遅かったな」

一足早く来ていた三沢が理人に声をかける。理人は三沢の傍まで
来ると、恥ずかしそうに答える。

「ちよつと、荷物の整理に手間取って……」

「そうか。まあとりあえず座った方がいい。そろそろ歓迎会が始ま
るからな」

「あ、うん」

理人は空いている三沢の隣の席に腰かける。するとすぐ寮長から
の挨拶が始まった。

「えー、私がこのラー・イエローの寮の寮長をしている樺山かへやまです。
新入生の皆さん、ラー・イエローによろこ。これから三年間、こ
のアカデミアでの生活を楽しんでください」

無難な挨拶が終わり、合掌と共に食事が始まった。

ラー・イエローの歓迎会で出された料理はどれもパーティーで出る様な豪勢なモノばかりだった。そして、その寮の歓迎会が終わったのは午後九時の十分前。理人は食事もそこそこにして自室に戻ってきていた。

「ふう……」

ラー・イエロー寮の部屋にはシャワールームが備え付けられており、理人はシャワーを浴びてからラフな服に着替えて、ベットに仰向けに倒れ込んだ。勿論、その状態でも例の帽子は被ったままである。

（なんだ？ 疲れたのか、リト）

ベットに倒れ込んだ理人にまたレイの声が響く。

「うん。今日は、かなり疲れたよ。もう寝てもいいかな？」

（おう。就寝まで俺が表に出てるぜ）

「それじゃあ、よろし……く……」

理人はゆっくりと瞳を閉じ、数秒後。理人はレイとして目を覚ました。

「さてつと」

レイは足を振り上げ、ベットから勢いよく跳び降りる。そのままクローゼットに向かい、ラフな格好から制服に着替える。だが、そ

の制服に袖を通す事はなく、ただ肩の上に羽織るだけ。

そして部屋の電気を消し、部屋の窓の前まで歩いていくと、一気に窓を開け放つ。窓を開けると共に夜の涼しい風が部屋の中に流れ込み、レイの頬を撫でる。

「……良い風だ」

そう呟いてレイは今まで理人が深々と被っていた帽子を取り払う。その帽子の下に隠されていた髪が月光の光に照らし出される。

その月光に照らされた髪は長く、その長さはどうやって収まっていたのかと思うぐらいで背中まで届くほどで、フワリと夜風になびく。そして、その髪の色は瞳と同じ

血の様な赤。

「んじゃ、夜の散歩と行きますか」

レイは開けた窓から外へ飛び降りる。普通ならそれだけでもかなりの勇気がある行為な上、それなりのトレーニングが必要となる。が、レイにはそんな常識は通用しない。

レイは地面に降り立つと、そのまま校舎に向けて歩き出した。ただ自分と呼ぶ何かがあるその場所へ行く為に。本当なら日僕後の外出は認められないが、彼の前には校則などあつて無い様なモノなのだ。

「はぁ……良い夜だ。この優しい闇が気持ちいいな。なぁ、そう思うだろ？ リト」

レイは寝ていて答える筈のない理人に問いかける。

「この心地よさなら、お前も安らかに眠れるよな」

夜空を見上げるレイ。眼は鋭いままだが、その表情はとても優しいものだった。自分の内に眠るもう一人の自分、理人。半身とも言える彼への優しさは、まさしく愛情そのものだった。

夜のアカデミアを歩き、正面の入口の真上にある屋上エリアまでレイは来ていた。そこから見える光景はまさしく気持ちのいいものだった。大きく広がる満天の星空と満月。そして、月光を反射して煌く夜の海。それはまるで理人が使う『ジェムナイト』の宝石のようだ。

「ん？ あれは……」

ふとレイが視線を落とすと、見覚えのある赤い制服を着た少年二人が校舎に向かって走ってくるのが見えた。

「確か、HERO使いのバカとバカの腰巾着だったな」

人の名前を憶えないのはレイの悪い癖だ。だが、それは二人を対等の相手だと認めていないと言っただけの事だが。

「こんな時間に何の用だ？」

レイは首を捻りつつも、屋上から飛び降りる。所々の出っ張りを足場に、まるで岩跳びの様に跳び降りていく。

無事に入り口前に降り立ったレイは、十代と受験番号119番が入っていった入口の奥を暫くの間、じっと見つめる。そして

「……面白そうだなあ。ちょっとつけてみるか」

口角を釣り上げて、十代の後を追う様に歩き出す。暫く歩いてい
ると直ぐに十代に追いつき、バレない様に隠れながら尾行する。

「アニキ！ 明日香さんが相手にしちゃダメだって！」

「なあに言っただ。デュエルだぞ？ 挑戦されたら受けるのが男
だろ」

「で、でも……」

どうやら十代は所謂不良などに分類されるロクでもない奴に絡ま
れ、助けてくれたであろう恩人の忠告を受けたにも拘らず、呼び出
されてこれからデュエルを行うらしい。

そのままレイが十代の後を追っていると、オベリスク・ブルーの
最新式デュエル・リングのデュエルアリーナに入っていた。

（ふーん、HERO使いのバカはなかなか度胸があるな。好きなタ
イプの人間だな）

レイは十代の態度と信条に、半ば化の好印象を抱いたようだ。が、
その視線は十代の横にいる小学生の様に背の低いオシリス・レッド
の生徒に向けられ

（それに比べて……アイツはただのポンコツ決闘者^{デュエリスト}か。嫌いなタイ
プだぜ）

ウンザリした様な眼でレイは小さい少年を見る。噂と見た目のみ
で相手を判断し、そして特に努力もせずに勝てないと決めつけ、挑
む勇気もない真正正銘の雑魚がレイは最も嫌うのだ。

だがそれでも彼らの後を追うレイ。そこでは、オベリスク・ブル

一の生徒と十代がデュエルを始めようとしていた。

「見せて貰うぜ？ クロノス教諭を倒したのがまぐれか実力か」

「ああ、オレも知りたかった所さ。デュエル・アカデミアのエリートって奴らが、どれぐらいの実力かさ」

「ははは！ いいか、互いのベストカードを掛けたアンティルルールだ！」

「ああ。何でも来やがれ！」

オベリスク・ブルーの生徒 万丈目準と十代まんじょうめ じゅんがデュエルディスクを起動させる。

『デュエル！』

万丈目準 LP4000 VS 遊城十代 LP4000

「まず俺のターン！ ドロー！」

万丈目は手札からモンスターカードをデュエルディスクに置く。

「リボーン・ゾンビを、守備表示で召喚！」

オオオ……。

肉の腐りかけたゾンビが膝について防御姿勢で現れる。

『リボーン・ゾンビ 4/闇属性/アンデット族/攻1000/守1600 効果：自分の手札が0枚の場合、フィールド上に攻

撃表示で存在するこのカードは戦闘では破壊されない』

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ!」

レイは物陰からデュエルの風景を眺める。だがその眼は鋭く細められている。

「オベリスク・ブルーとオシリス・レッド。この頭脳の差が既に勝敗を決めているんだよ」

「デュエルは頭ん中でやるもんじゃない。アイツ心でぶつかるもんだぜ!」

万丈目の台詞に十代は熱く反論する。

「オレのターン、ドロー」

十代はデッキからカードをドローして手札を確認し、何やらぶつぶつと呟く。

（なんだ？ 何を言ってるんだアイツ）

「貴方、何してるの？」

（っ!）

突然後ろから話しかけられたレイは、思わず拳を振り上げそうになったがその声が女性であり、敵意が無いと即座に理解して押しとどめて振り返る。

そこには、金髪の美人なオベリスク・ブルーの女生徒が立ってい

た。

「別に何も、ただデュエルを見てただけさ」

「デュエル？ …… ああ、やっぱり」

女生徒は、レイの向こう側に見える風景を見て納得する。レイは首を傾げ、疑惑の目を彼女に向ける。

「彼が寮を出ていくのが見えたから、もしかしたらと思つて後をつけてきたの」

「魔法カード、融合発動！」
マジック

レイが彼女から事情を聴いている間に、十代が『E・HERO フェザーマン』『E・HERO バーストレディ』を手札融合させ、
『E・HERO フレイム・ウイングマン』融合召喚する。

『E・HERO フレイム・ウイングマン 6/風属性/戦士族
/攻2100/守1200 融合「E・HERO フェザーマン」
+「E・HERO バーストレディ」 効果：このカードが戦闘によつてモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。』

「マイ、フェイバリットカードだぜ」

だが、この状況では実に不用意な行為だった。

「さつそく掛かったな。お前の入試デュエルは既に念密に分析済みだ。デュエルは頭脳だ！ 罠カード、ヘル・ポリマー発動！」
トラップ

万丈目の場のリバーズカードがオープンになり、『ヘル・ポリマー』が発動する。

『ヘル・ポリマー 通常罠／相手が融合モンスターを融合召喚した時に発動する事ができる。自分フィールド上のモンスター1体をリリースする事で、その融合モンスター1体のコントロールを得る』

「ヘル・ポリマーって……？」

「デュエリスト決闘者にとって、基本的な知識よ」

女生徒が物陰から出ていき、十代の腰巾着の下へと歩いていく。

「明日香さん」

「相手が融合モンスターを融合召喚した時、自分の場のモンスター1体をリリースする事で、そのモンスターのコントロールを得る事が出来る」

「え？ それってどういう事？」

明日香と呼ばれた女生徒の説明にも全く理解できていない腰巾着

「要するに、ああいう事さ」

明日香の後ろから現れたレイが十代へ注意を向けるのを促す。注意を促された腰巾着はデュエルへ注意を向ける。

「リボーン・ゾンビをリリースし、フレイム・ウィングマンのコントロールを得る！」

『リボーン・ゾンビ』が消えていき、融合召喚された『E・HERO フレイム・ウィングマン』が爆発と共に万丈目のフィールドに黒いオーラを纏って現れる。

「モンスターが取られちゃった!？」

「クロノス教諭での戦いのトドメが融合モンスターだと知って、その罠を張っていたのさ。そんな事も知らずに、まんまと罠に入り込んでくるとはな。所詮オシリス・レッドだ」

万丈目は思った通りの展開に優越感を丸出しにして浸り、十代はまだ残されている通常召喚権を使って何を場に出すか考える。

その間に、レイは今に起きた出来事に対する予測としての分析を述べる。

「リボーン・ゾンビは手札ゼロの状態プラス攻撃表示で初めて、戦闘では破壊されない効果を発揮するカード。序盤で出すカードじゃない」

レイは無情なほど冷静に現状までの分析を説明し始める。

「と、いう事は、本命は伏せ^{リバース}カード。HERO使いバカの行動に対するカウンターだという事ぐらいは容易に想像できる。そしてアイツは融合HEROを主体とする。まるで絵に描いたような基礎基本の応用だな。何の捻りもない」

やれやれと肩をすくめるレイ。

「オレは、E・HERO クレイマンを守備表示で召喚」

ぬうおお！

十代の場に岩の様なHEROが現れる。

『E・HERO クレイマン 4 / 地属性 / 戦士族 / 攻800 / 守2000』

「ターン、エンドだ」

「カード、ドロー！」

万丈目がデッキからカードをドロし、手札からモンスターを召喚する。

「地獄戦士を召喚！」

『ヘルソルジャー 地獄戦士 4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守1400』

「行け！ フレイム・ウィングマン！ フレイムシュート！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』が焰を纏って防御姿勢の『E・HERO クレイマン』を引き裂き、『E・HERO クレイマン』は砕け散る。

「フレイム・ウィングマンのモンスター効果はよく知っているだろ？」

「っ！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』の破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果が発動し、十代の目の前で『

E・HERO フレイム・ウィングマン』の竜の頭の様な右腕から炎が噴出し、十代を包み込む。

「ぐああああ！」

十代 LP 4000 - 800 = 3200

「これでお前を守るモンスターはいない！ 地獄戦士！ ヘルアタック！」

『ヘルソルジャー 地獄戦士』が両手に持っている両手剣で十代を切り裂く。

「ぐう………！」

十代 LP 3200 - 1200 = 2000

「融合モンスターを封じられて、もう打つ手なしだな！ スモールタウンではどうだったか知らないが、お前はデュエル・アカデミアでやっていけるレベルではない！」

万丈目が体感した痛みで蹲る十代を見て優越感を更にワザとらしく曝け出す。

「カードを一枚セットし、ターンエンド！ さあ、お前の番だ！」

「ふ……く……く………！」

「悔し泣きかい？ 110番」

だが十代は俯いたまま肩を震わせているのを悔し泣きしているの

だと勘違いした万丈目が問うが、帰って来たのは笑い声だった。

「くふふ、あははは！ 感動だぜ」

「何！？」

「デュエル・アカデミアは楽しいな。お前みたいのがゴロゴロしてるんだ。楽しみだぜ」

「なんだと？」

「オレのターン、ドロー！ E・HERO スパークマンを召喚！」

ウオオオオオ！！

放電しながら電撃のHEROが姿を現す。

『E・HERO スパークマン 4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1600 / 守1400』

「いけえスパークマン！ スパーク、フラアーツシュ！」

でええええ！！

『E・HERO スパークマン』が全身の電撃を右手に集中して、ヘルソルジャー『地獄戦士』に向かって解き放つ。その電撃を受けたヘルソルジャー『地獄戦士』は感電して爆発する。

「ぐう……くつ！」

万丈目 LP4000 - 4000 = 3600

しかし爆発した煙の中から『ヘルソルジャー地獄戦士』の持っていた剣が飛び出し、十代を貫く。

「ぐあ！」

「モンスター効果発動だ！ 地獄戦士は破壊された時に自分が受けたダメージ分のダメージを相手にも与えるのだ！」

「くっ……」

十代 LP 2000 - 400 = 1600

「アニキ！」

腰巾着が取り乱す。

「貴方の兄さん、威勢はいいけどちょっと迂闊ね。モンスター効果を無視するなんて」

「十代君はホントのお兄さんじゃなくて、なんていうか……僕の心のアニキなんだ」

「……？」

明日香が腰巾着の説明に首を傾げる。

「要するに自分勝手に兄貴と呼んで慕ってるだけって事だろ」

「ああ、なるほど。子分ってやつね」

「もしくはパシリだな」

明日香の知識は若干偏っているが、一般知識としてはその程度だろう。だがレイは面白がっているようでニヤニヤと笑みを浮かべている。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「次の攻撃で俺の勝ちだ。カード、ドロー！ 行け！ フレイム・ウィングマン、スパークマンにフレイムシュートだ！」

万丈目はドローしたカードを見る事無く、『E・HERO フレイム・ウィングマン』に攻撃の指示を飛ばす。

「^{トラップ}罠カード、異次元トンネル ミラーゲート！」

「何!?!」

万丈目がまさかの罠に驚愕する。

「ミラーゲート!?!」

「モンスター同士の戦闘時に発動できる罠^{トラップ}。自分と相手のモンスターのコントロールを入れ替えて戦闘させる」

「なるほど。このためにダメージを負ってでも、モンスターを破壊したって事か」

「異次元トンネル・ミラーゲート」の効果で、万丈目の場にいる『E・HERO フレイム・ウィングマン』と攻撃を受けた『E・

HERO スパークマン』のコントロールが入れ替わる。

「スークリングブレイカー！」

ウアアアアア！！

ゲオオオオオ！？

『E・HERO フレイム・ウィングマン』から発せられた電撃で『E・HERO スパークマン』が戦闘破壊される。

「ぐあああ！？」

万丈目 LP 3600 - 5000 = 3100

「更に！ フレイム・ウィングマンのモンスター効果で、破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを相手に与える！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』の効果が電撃となつて万丈目のライフポイントから1600ポイントを奪う。

「うあああああ！？」

万丈目 LP 3100 - 1600 = 1500

「ふうん。やるじゃない」

「アニキ格好いい！」

腰巾着の声援を受けた十代は、万丈目を見つめながら背後のレイ

たちに向かってVサインを向ける。

「ふふ、お調子もん」

「ははは、なかなかの戦術だぜ」

明日香は若干苦笑いで、レイは微笑を浮かべながら呟く。

「この、調子に乗るな。オシリス・レッドのドロップアウトめ！」

万丈目はバトルフェイズからメインフェイズ2に移って手札から魔法カードを発動させる。

「手札から魔法^{マジック}カード、ヘル・ブラストを発動！」

万丈目と十代の間で風の渦が巻き起こる。

「自分がコントロールするモンスターが破壊されたターンに、フィールド上のモンスター一体を破壊。その攻撃力の半分のダメージを与える」

風の渦は『E・HERO フレイム・ウィングマン』を包み込んで破壊する。そしてその攻撃力の半分、1050ポイントのダメージを受ける。

「フレイム・ウィングマン……」

十代 LP1600-1050=550

「更に畏^{トラップ}カード、リビングデットの呼び声発動！」

伏せられていたリバーズカードがオープンされる。

「自分の墓地のモンスター一体を攻撃表示で特殊召喚する。地獄戦士を特殊召喚！」

『リビングデットの呼び声』の効果で『^{ヘルソルジャー}地獄戦士』が蘇る。

「そして地獄戦士をリリースし、地獄將軍・メフィストを召喚！」

『^{ヘルジエネラル}地獄將軍・メフィスト 5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守1700 効果：このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札からカードを1枚ランダムに捨てる』

「どう転んでも、俺の勝ちが決まったようだな。アンティルールによつて、お前のベストカードを貰うぜ」

「ふつ。それはどうか」

「なに？」

一瞬万丈目も動揺するも、直ぐに冷静さを取り戻す。

「フツ。デュエルは99%の知性で勝敗は決する。運はたった1%に過ぎない」

だがその運命のドロ^{デュエリスト}ーを出来るのが、真の決闘者^{デュエリスト}なのだ。そして遊城十代はその決闘者に近い所に居る。

「その1%にオレは賭ける。オレの引きは奇跡を起こす。オレのターン、ドロー！」

十代は勢いよくカードをドロ。そしてそのカードを見て

「まずいな、見回りが来たぜ」

足音が聞こえたのか、レイが部屋の出口の方を睨みつけて言う。

「まずいわ。アンティールは校則で禁止されてるし、時間外に施設を使ってるし、校則違反で退学にされるわよ！」

事の重大さにいち早く気付いた明日香が警告する。

「え！？ そんな校則あるの！？」

おそらく生徒手帳を呼んでいないのだろう十代がびっくりする。

「万丈目さん！ やばいつすよ！」

「今夜はこれまでだ。俺の勝ちは預けておいてやる」

「まだ勝負は終わっちゃいないぜ！」

「もう十分さ。お前の实力は見せてもらった。入学試験はまぐれだったようだな」

「ふざけんな！ 逃げるのかよ！」

十代が叫ぶが、万丈目たちは通路の奥へ消えていく。

「アニキ、見つかったちゃうよ!」

「こつちよ!」

腰巾着と明日香が声を掛けるが、十代は動かない。

「うう……嫌だ! オレは此处から動かない!」

「子供か」

十代の駄々っ子に、思わずレイはツツコミを入れる。だがこのままだと本当にまずいので、レイは十代を無理やり抱き抱える。

「お、おい!」

「入学したてで問題起こすなよ。行くぞ!」

「こつちよ」

レイは十代を抱えたまま、明日香の案内に従ってデュエルアリーナを後にする。その数十秒後、巡回しているガードマンがアリーナに入ってきた。まさにギリギリのタイミングだった。

途中で十代を降ろしたレイたちは、校舎の外で一息ついていた。

「ふう……ここまでくれば大丈夫か?」

「ええ。まったく、世話の焼ける人ね」

明日香が未だに拗ねている十代を見ながら言う。

「ちえ、余計な事を」

「どう？ オベリスク・ブルーの洗礼を受けた感想は」

「まあまあかな。もう少しやると思ったけどね」

「そうかしら？」

明日香が十代に詰より、問う。

「邪魔が入らなかったら、アンティールで大事なカードを失う所じゃなかった？」

「いや、今のデュエル。オレの勝ちだぜ」

そう言っで見せてくるのは、さっきドロしたまま手に持っている魔法カード『死者蘇生』。『死者蘇生』で『E・HERO フレイム・ウィングマン』を墓地から特殊召喚して止めを刺すつもりだったらしい。そうすれば戦闘ダメージと効果ダメージの合計2100が万丈目のライフをゼロにしていただろう。まさしく運命のドロだ。

「さて、オレもそろそろ帰るか」

レイが寮に向かって歩き出そうとした所で、十代がレイに声をかける。

「なあ、お前の名前なんて言うんだ？」

「ん？」

レイは立ち止まって振り返り、ニヤリと笑って名乗る。

「オレはレイ。お前らは？」

「俺は遊城十代」

「私は天上院明日香てんじょういん」

「僕は丸藤翔まるふじ しょうです」

「よろしくな。といっても、また会えるかどうかはわからないけどな」

「は？ どういう事だよ？」

「ま、運が良ければまた会えるさ。じゃあな！」

レイは十代たちに挨拶すると、そのままラー・イエローの寮に向かって歩き出した。

（此処なら、きっと大丈夫だぜ。リト！ もう、あの頃のような地獄を味わう事は無い）

理人にも、十代たちにも内緒のこの邂逅に、レイはただ一人心中で笑っていた。

TURN・02 フレーム・ウィングマン（後書き）

次回予告

翔

「アニキアニキアニキ！」

十代

「おつせえぞ、翔。どこ行ってたんだよ。体育の授業とつくに始まつてるぞ！」

翔

「ごめんごめん。それよりさ、これ見てよ！明日香さんからラブレター貰っちゃった！」

十代

「ふうん……」

翔

「もう、もっと驚いてよ」

理人

「はあ……」

十代

「ん？ こっちもこっちでどうした？」

理人

「なんか呼び出されちゃって、憂鬱なんだ」

十代

「ああ……。よくわかんねえけど、頑張れよ」

翔

「もう二人とも無視して！ いいもん、僕一人で行くよ。いざ、女子寮へ！」

次回 TURN - 03 エトワール・サイバー

十代

「おい！ 翔、どこ行った！？」

レイ

「腰巾着……。お前……」

翔

「誤解だよー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524y/>

遊 戯 王デュエルモンスターズGX 十輝石の騎士十

2011年11月17日18時49分発行